

新書紹介

21世紀の情報生活入門

川勝 又

ロバート・ギャリティ 共著

産能大学出版部 二百二十八頁 千六百元

世はまさにマルチメディア時代である。企業は様々な技術を開発し、あれもできるこれもできるとプレゼンテーションをし、これと聞いてみると、技術の急速な進歩に驚かされ、何でもできるような錯覚に陥ってしまう。

マルチメディアに関する本は、昨年頃から数多く出版され、この景気の悪い状況にあつて、一大ブームを起している。これらの出版物の傾向を見てみると、「マルチメディア」と称して情報通信やコンピュータに関する最先端技術の紹介と「マルチメディア」によって実現できる様々な可能性を紹介しているものが多い。確かに、マルチメディアは様々な可能性を持ち、樂觀的な見地からその可能性を議論した方が良いアイデアが生まれ、かきつてのニューメディアと呼ばれる時代の反省を踏まえ

ながら、更なる発展をするためには、問題点も十分に把握しながら対応を図ることも忘れてはならない。

さて、ここで紹介する書籍は、「21世紀の情報生活入門」という題とは裏腹に、どちらかというマルチメディアに対する姿勢を批判的な目で見据えながら、日本独自の新情報通信時代の構築とマルチメディアのあり方を提案しているものである。「生活」というよりは、世界も含めて「社会」を語っている感じである。内容について見てみると、まず、力を入れて鋭く分析していると感じられるのは、日本と欧米諸国、特にアメリカとの情報政策や情報環境の違いである。

いくつか紹介すると、「日本人は華民族、欧米人はタイプライター民族であり、アメリカでは八歳からタイプライターを学習するため、ブライントタッチは当然にできる(要約)」とキー

ボード環境の違いを指摘している。また、「日本人は顔と顔をつきあわせるコミュニケーションを好み、電子メールには馴染みにくい(要約)」と書き、さらに「電子メールによって一種のブレンストミシングができ、他人の発言に対して付加価値をつけられない人は淘汰されて行く」と引用している点では、電子メールがアメリカの国民性の基に発展していると指摘しているように感じられる。CATV

に関して面白いのは、欧米諸国における地上波の数とCATVの普及率とを比較し、地上波が少ない国ほどCATVの普及率が高くなつており、日本の地上波が七波というのはかなり多いほうであるとしている点である。特にアメリカでは、三大ネットワークにUHFによる難視聴対策が取られていなかったことが、CATVを普及させた大きな要因としている。

また、本書の中で特に手厳しいと感じたのは、行政、特に「通産省と郵政省が対立しているようでは日本の情報スーパーハイウエーはあり得ない」と言っている点である。確かにマルチメディアは、あらゆる情報が統合化され、効率的にサービスをを行う技術を提供するものであり、縦割り主義といった情報化以前の事務改善ができていなければ、何の効果も発揮しないことは明白である。

最近、我が家にもマルチメディアパソコンなるものが登場したが、音は出る、絵は動く、でその面白さに子供は順番待ちでけんかをしている。しかし、これ

は単に企業の技術にのつたものを使用しているだけであり、ある目的を持ってシステムを開発するとなるとこうは簡単ではない。

自治体が行う情報化施策は、情報通信網というハードを利用して市民のニーズに応じて心のこもったサービスを構築していかなければならないものであり、様々な課題に謙虚にかつ積極的に取り組むことが情報化の鍵となる。アメリカのかつてのケネディ大統領は、「最悪を予測しながら最高を望め」といった。マルチメディアの構築と運用にあたってこれを銘記すべきであり、本書はその一助になると思う。

△消防局計画課長補佐 小野 和夫▽

(注) F T T H (Fiber To The Home)

国内のネットワークは高速で大容量の情報を送れる光ファイバー化が進められており、現在、幹線網が光ファイバー化されている段階であるが、これをさらに進め、各家庭までも個別に光ファイバーで配線すること。これによりネットワーク全体の光ファイバー化が完成する。